

大淀川清流ルネッサンスⅡ協議会

令和2年度作業部会 会議資料概要

1. 行動計画書（平成31年2月改定）について

- ・ 目標年度は2023年度、目標水質は水質評価地点（樋渡橋、乙房橋、志比田橋、岳下橋）において、達成すべき目標値、目指すべき目標値を設定。
【資料-2 p3】
- ・ 行動計画は①取組み施策の重点化、②産官学民協働、啓発・広報の推進、③フォローアップの効率化・強化を進めていく。作業部会メンバーに学校等、事業者、住民団体が加入、連携強化等
【資料-2 p4】

2. モニタリング結果

- ・ 水質調査結果について、H31(R1)において達成すべき目標値は、評価4地点（樋渡橋、乙房橋、志比田橋、岳下橋）・項目（BOD、全窒素、全リン、糞便性大腸菌群数）で満足している。年度毎で見ると数値上昇・低下のバラツキはあるが、緩やかな改善傾向にある。
- ・ H31（R1）のBODはH30と比較して悪化している。支川の一部地域でもBODが悪化しており引き続き監視が必要。
【資料-2 p14】

（1）ハード施策

- ・ ハード施策について、多くの項目で改善傾向にある。一方、排水規制対象事業場に対する立入調査に伴う行政指導件数で前年より変化が大きく、水質の悪化による基準値超過、苦情通報の増加等が要因として考えられた。
【資料-2 p7】

（2）ソフト施策

- ・ ソフト施策について、各項目で目標水準を満足している。情報拠点の整備について、大淀川清流ルネッサンスⅡのバナー案を作成、第1回作業部会で決定した。各関係機関にバナーの設置・リンクをお願いする。
【資料-2 p10】

3. 産官学民協働の取組み

- ・ 学校の取組みとして都城工業高校化学技術部と国交省の水質調査結果より、傾向としては、両者とも似た傾向を示しており、BODの差異が大きい箇所については調査日時の違いが原因として考えられる。
【資料-2 p17】

- ・ 企業の取組みとして霧島酒造、ヤマエ食品工業の河川環境、水資源、情報拠点、環境保全活動、モニタリングの取組が行われている。【資料-2 p18】
- ・ 住民団体の取組みとしてどんぐり1000年の森をつくる会、手仕事舎そうあい、都城メダカの学校、都城大淀川サミットの河川環境の河川環境、家庭内での対策、水資源、情報拠点、普及啓発活動、モニタリングの取組が行われている。どんぐり1000年の森をつくる会の活動が「令和2年度手づくり郷土賞」で大賞を受賞 【資料-2 p19】

4. WEB アンケート結果報告

- ・ 地域住民を対象に大淀川水環境の現状把握、今後大淀川水環境に期待すること、取り組みたいことを把握するために地域住民を対象にWEBアンケートを実施。 【資料-2 p21】
- ・ 結果より河川環境への関心、清流ルネッサンスⅡの認知度の低さが課題であり広報活動の充実が必要。河川水質を悪くする要因として家庭排水と感じつつも家庭排水対策が不十分で身近にできる家庭排水対策、合併浄化槽への切替、下水道への接続等のPR、普及啓発が必要。将来、身近な川に期待することは、水辺で水遊びできる程度の水質が望まれており、水辺へのアクセス改善、河川利用促進の河川環境整備（かわまち事業）等も併せて進めていくことが必要。 【資料-2 p28】

5. 昔の大淀川の利活用

- ・ 昔の大淀川の利活用（漁業、舟運、川遊び）として、昭和2年頃はプールが少なく、川で泳いでいた。昭和30年代後半、でん粉工場排水による河川汚濁があった。昭和30～40年代は養魚場があり、河川にも魚介類（鰻、シジミ、鮎）が生息していた。 【資料-2 p30～32】

6. 生態系サービスの取組

- ・ 生態系ネットワーク形成の取組について大淀川流域における生態系サービスの具体例等を示している。また、各自治体の関係者の方々へ生態系ネットワーク形成に向けヒアリングをお願いしたいと考えている。 【資料-2 p33～41】

7. 令和元年フォローアップ結果総括

- ・ 行動計画の目標達成に向けて、各機関において下水道・合併浄化槽の整備、家畜排せつ物対策等によるハード施策、大淀川クリーン作戦等の河川清掃、環境にやさしい製品の利用促進等のソフト施策に取り組んで頂いた結果、全体的には緩やかな改善傾向が確認された。

- 一方、H31 (R1)の BOD は、H30 と比較して水質評価 4 地点、支川の一部地点で悪化、事業場排水対策の立入調査に伴う行政指導件数も増加、将来、川に期待することとして「水遊びできる川」、「自然が豊かな川」等の意見もあることから、今後も引き続き、普及啓発、河川整備等を進めていく必要がある。 **【資料-2 p43】**

以上